

LCセミナー2022:言語文化学への招待Ⅱ

本専攻では、平成14年度から毎夏開講してきた「教員のための英語リフレッシュ講座」を発展的に解消し、令和3年度からは、「言語文化学」公開講座として新たに「LCセミナー:言語文化学への招待」をスタートさせました。本講座では、これからのグローバル化社会の発展に必須である、最新の言語文化学の知見に触れる場を提供します。令和4年度は表象文化論、コミュニケーション論、認知言語学と幅広い分野の第一線で活躍中の本専攻の教員がそれぞれの研究成果について専門外の方々にとってもできるだけ親しみやすい言葉で解説します。3つの異なる分野の講義をきっかけとして、コロナ禍をはじめとする困難な世界情勢の中で、広く「言語」と「文化」について考えてみませんか。本講座を通して、参加者の皆さまが言語文化学に興味を抱いていただけることを願っています。さらに、今回ご参加いただくことで、本専攻での研究を志される方がいらっしゃれば、望外の喜びです。

- 日 程 令和4年9月17日(土)13時~16時40分(予定)
 - 会 場 オンライン(Zoom)にて開催
 - 受 講 料 無料
 - 定 員 300名(先着順、定員に達した時点で大阪大学大学院人文学研究科言語文化学専攻HPに掲示します)
 - 受 付 期 間 8月8日(月)~9月15日(木)
 - 申 込 込 み 次のリンク先のフォームからお申し込みください。
<https://forms.gle/aN1EHnhNyChiQKBA6>
 - 問 合 合 大阪大学大学院人文学研究科豊中事務部総務係
(E-mail: jinbun-soumu@office.osaka-u.ac.jp TEL: 06-6850-5855)
 - プログラム
- | | | | |
|-------------|--|------------------|---------|
| 13:00~13:10 | 開会の挨拶 | 人文学研究科・言語文化学専攻長 | 由本陽子教授 |
| 13:10~14:10 | 講義1: 村上春樹と濱口竜介の『ドライブ・マイ・カー』
~小説と映画の魅力をゆっくり解説~ | | 津田保夫教授 |
| 14:20~15:20 | 講義2: 排除と共生の狭間で:社会言語学に何ができるか | | 秦かおり准教授 |
| 15:30~16:30 | 講義3: 言語形式に結びつく意味とその拡がり
—認知言語学的言語観— | | 早瀬尚子教授 |
| 16:30~16:40 | 閉会の挨拶 | 人文学研究科・言語文化学副専攻長 | 山本佳樹教授 |

* 大学院人文学研究科の情報は以下のサイトでもご覧いただけます。

人文学研究科 HP <https://www.hmt.osaka-u.ac.jp/>

人文学研究科 Facebook <https://www.facebook.com/HmtOsakaUniversity/>

人文学研究科 Twitter https://twitter.com/ou_hmt_info

講師プロフィール & 講義内容

村上春樹と濱口竜介の『ドライブ・マイ・カー』 ～ 小説と映画の魅力をゆっくり解説 ～ 津田保夫 表象文化論講座 教授

- プロフィール：専門はドイツ文学・思想史、村上春樹研究。著書に『言語と文化の饗宴』（共著：英宝社）、『18世紀ドイツにおける文学の人間学の研究』（科研費研究成果報告書）、論文に「村上春樹の短編小説におけるミザナビーム手法」「村上春樹『ノルウェイの森』におけるホモソーシャル関係と恋愛」（言語文化共同研究プロジェクト）、「シラーにおける身体の問題」（ドイツ文学）他。
- 講義内容：2021年8月に公開された濱口竜介監督の映画『ドライブ・マイ・カー』は村上春樹の同名の短編小説を原作としていますが、様々な変更が加えられて原作とはかなり異なるアダプテーション作品となっています。この映画はアカデミー賞国際長編映画賞を受賞するなど国際的にも高く評価された一方で、どこが面白いのかわからないといった意見も少なくありません。そこでこの講義では小説と映画を分析し比較しながら、それぞれの異なる魅力についてゆっくり解説したいと思います。なお作品内容の重要な部分（いわゆるネタバレ）にも触れますので、あらかじめご了承ください。

排除と共生の狭間で：社会言語学に何ができるか 秦かおり コミュニケーション論講座 准教授

- プロフィール：ロンドン大学ゴールドスミス校博士後期課程 Media and Communications 専攻退学。専門は、社会言語学、コミュニケーション論、語用論、メディア学。特にナラティブ研究。英国在住の日本人移民への縦断調査を行なっている。著書に『ナラティブ研究の最前線—人は語ることで何をなすのか—』（共編著：ひつじ書房）、*Bonding through Context: Language and interactional alignment in Japanese situated discourse*（共編著：John Benjamins）など。
- 講義内容：本講義では、本専攻の分野II、コミュニケーション論講座において何を学習することができるかを概説した後、報告者の専門分野である社会言語学、とくにナラティブ研究を通して、意識的／無意識的に表出・再生産される差別の構造について分析します。実際の談話から分析すると、差別とは単純な「差別 vs. 被差別」ではなく、被差別者も差別者となる入れ子式の構造となっており、実生活のさまざまな側面でそれが展開されていると考えられます。このことを実際のデータを見ながら確認し、その差別が「排除と共生」にどのように関わっているかを考察します。2020年からの新型コロナウイルス感染症拡大に始まり、近年ではロシア・ウクライナ情勢と、私たちは今、これまでに経験のない有事の只中にいます。このような社会の激動の中で、差別・排除の問題をもう一度振り返り、真に共生するとはどのようなことかを改めて議論します。

言語形式に結びつく意味とその拡がり — 認知言語学的言語観 — 早瀬尚子 言語認知科学講座 教授

- プロフィール：博士（文学）。専門は認知言語学分野における構文論。著書に「懸垂分詞構文を動機づける内の視点」（『「内」と「外」の言語学』編著書、開拓社 2009）、『認知文法の新展開—カテゴリー化と用法基盤モデル』（共著書、研究社 2005）『構文の意味と拡がり』（共著書、くろしお出版 2017）『認知文法・構文文法』（共著書、開拓社 2020）、『構文と主観性』（共著書、くろしお出版 2021）など
- 講義内容：認知言語学という研究分野では「形式が異なれば意味も異なる」という前提に立って言語を分析していきます。言語表現は様々な形式をとりますが、その一つ一つが、それ固有の世界のとらえ方、切り取り方、解釈と結びついた「構文」である、と認知言語学では考え、その特徴を様々な側面から明らかにしようと試みます。また言語表現は、既存の世界を描写するだけではなく、新しい対象へと相手の注意を向けたり誘導したり、相手の考える道筋を変化させたりする機能とも結びついていて、動的な目的でも使われます。この講演では、このような認知言語学の考え方に基づく分析例として、懸垂分詞と呼ばれる英語の構文現象を取り上げてお話しします。この表現パターンが好む世界のとらえ方は、英語がもつばら得意とする描写パターンとは一味違った特徴をもつことを、対応する日本語の類似表現ケースと比較しながら説明していきます。またこの表現形式の中には、話題を変えたり注意をそらそうとしたり、人の認識に働きかけようとする誘導的な使用にまで発展しているものがありますが、なぜそのような意味機能へと変化する可能性があるのか、その動機づけについても触れます。一つの表現形式が様々な使われ方への出発点となり、互いに関連しながら言語知識の拡がりを作っていることを、ご一緒に感じていきたいと思っています。